



新緑の高村山荘

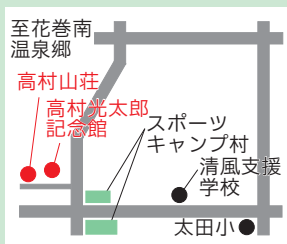


高村光太郎記念館●新装開館

高村山荘に隣接する花巻歴史民俗資料館を「高村光太郎記念館」としてリニューアル。5月15日(水)にオープンします。

- ▶開館時間 午前8時30分～午後4時30分
- ▶料金 小中学生150円、高校生・学生250円、一般350円
- ▶休館 12月28日～1月3日

【問い合わせ】
本庁賢治まちづくり課(☎24-2111内線371)



賢治と光太郎

大正15年(1926年)、宮沢賢治は、既に『道程』などで人気作家となっていた光太郎に師事を仰ぐため東京のアトリエを訪問。この時はあいさつ程度で終わり、後日また会うことにしました。

賢治の詩集『春と修羅』を見た光太郎は、早くからその非凡な才能を感じていました。賢治が昭和8年(1933年)、37歳の若さで亡くなると、やがて遺稿集が発刊され、その中で光太郎は、賢治の作品が新しい世界の芸術の一つと絶賛。賢治を高く評価していました。翌年、光太郎と草野心平(※)、そ

して賢治の弟・宮沢清六氏の編さんによる『宮沢賢治全集』が刊行され、光太郎はその本の装丁を手付けました。昭和11年(1936年)には、賢治が住んだ桜町の羅須地人協会跡に「雨ニモマケズ」の記念碑が建立されましたが、碑文の文字は光太郎の筆によるものです。昭和20年4月の空襲で、光太郎のアトリエが焼失したことを知った清六氏や花巻病院院長の佐藤隆房氏が光太郎を花巻に迎え、同年5月15日、光太郎は東京を出発。清六氏宅に身を寄せることとなったのです。

- ※草野心平(くさの しんぺい) 1903～1988
福島県いわき市出身の詩人で、光太郎や宮沢清六氏とともに賢治の作品を世に出した人
- ※岸田劉生(きしだ りゅうせい) 1891～1929
東京都出身。大正から昭和にかけて洋画家として活躍。代表作は娘を描いた「麗子像」や「道路と土手と塀」など

略歴

高村光太郎は、明治16年(1883年)、東京で生まれました。父は彫刻家として著名な高村光雲。その長男として生まれた光太郎は、東京美術学校(現在の東京藝術大学)で彫刻や西洋画を学び、アメリカやヨーロッパにも留学。当時最先端をいく気鋭の芸術家でした。

また、光太郎は、学校在学中から文学雑誌に寄稿するなど、文学にも才能を見せていました。

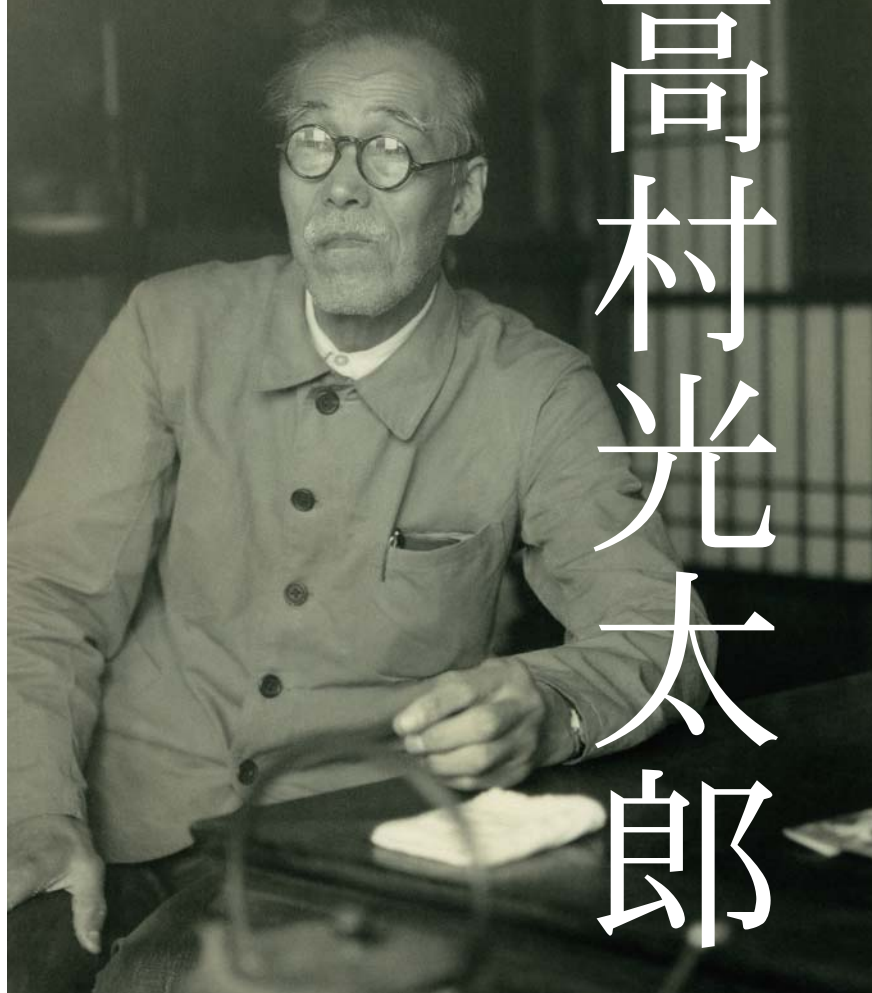
明治45年(1912年)には、東京駒込にアトリエを建設。大正3年(1914年)には、詩集『道程』を出版。同年、長沼智恵子と結婚しました。昭和13年(1938年)に智恵子は亡くなります。智恵子との思い出をつづった詩集『智恵子抄』は、昭和16年(1941年)に出版されました。智恵子の死後、光太郎は他の作家と同様に、戦意を高揚するための詩も多く発表するようになりました。

昭和20年(1945年)、空襲により東京のアトリエが焼失し、多くの作品も失いました。同年5月、親交のあった花巻町の宮沢清六氏(宮沢賢治の弟・宅に疎開しましたが、同年8月には宮沢家も空襲で被災。光太郎は、そのまま花巻で終戦を迎え、同年10月、花巻郊外の稗貫郡太田村山口に小屋を建てて移り住み、そこで7年間、一人で自炊生活を送りました。この小屋が今も残されている「高村山荘」です。

昭和27年(1952年)には、十和田湖畔に建立する記念碑の制作を青森県から依頼され、東京で「乙女の像」の制作に取り掛かりました。この像は翌年完成しましたが、光太郎は東京で病の床に就き、昭和31年(1956年)4月2日、肺結核のため死去しました。73歳でした。

光太郎の命日(4月2日)は、彼が好きだったレンギョウの花にちなんで連翹忌と呼ばれています。

高村光太郎



130周年

市内太田には、彫刻家で詩人として知られる高村光太郎が晩年暮らした「高村山荘」があります。ことしは高村光太郎の生誕130周年に当たる年。これを記念して、高村山荘に隣接する花巻歴史民俗資料館を「高村光太郎記念館」として整備するなど、記念事業を始めます。皆さんも高村光太郎の足跡をたどってみませんか。

エピソード

光太郎が書いた「雨ニモマケズ」の碑文には、誤字脱字がありました。昭和21年、石碑が修正されることになりましたが、光太郎は足場に乗り直接石碑に筆書きして、それを石工にそのまま彫らせました。そのため、行間に加筆訂正がある碑文となりましたが、光太郎は、訂正のある石碑は珍しく面白いと満足したと言われています。

日本の洋画界の先駆者として知られる萬鉄五郎は、東和町土沢の出身。萬は、明治45年に光太郎や岸田劉生(※)が結成した「フェウザン会」に参加しています。また、土沢にある割烹「小桜家」には、食事に感謝した光太郎が彫り物をしたと言われるテーブルが残されています。

光太郎は、近くの山口小学校の校訓を考案したり、学芸会にサンタクロースの格好で参加するなどし、子どもたちや村人から慕われていました。また、世界を幸せにするには教育と文化が大事として、図書や楽器などを学校に寄付しています。